

報 籠屋新聞 39号

悼 半田正夫さん逝く
追 津山丸最後の生き残り兵

後藤政之の
人 復たきた
日本 十島村
の 支えて
支えて
村内
読 書

二〇一四年（平成二六年）六月二日に鹿児
島市内の病院で逝去された。大正十二年はま
れの大十三歳であった。最後の二等兵として
出征し、フィリピンのルソン島で終戦をむか
える。半田さんは何度死にかけたか、数え
るのがむずかしい程に多い。二二〇〇分の
の異名を付けられるほどに、生死の境を
まぐりぬけてきた。船舶工兵の同期生
が全国に二二〇〇人誕生した中での数少
ない生き残り兵であった。

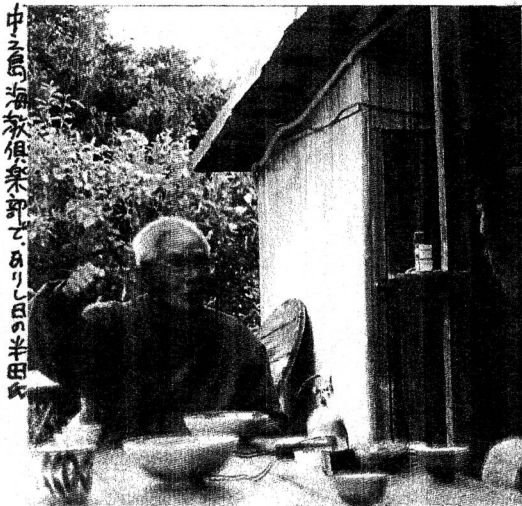
まず、呉にて入営するが、戦雲急な昭和
十九年に、特種潜航艇（人魚雷艇）の開
発が進められていた。教官が志願者を一つ
つたとし、一六〇余名の中から四名しか希
望しなかった。小艇に魚雷を搭載し敵
艦に体当たりするのだから、生きてはかえれな
い。半田さんの初志貫徹、ふりは生涯ゆめぐ
ことはなかったが、その志願したのが
数え年の二十歳である。生死の別れ目は
ここから始まる。四名を除く全員が

籠屋新聞社
〒299-2854
鴨川市代623
E-mail
ragoyamao
@gmail.com

トラ塾 H.P.
http://www.
sakura.me.
jp

紙代、切手代
カンパ大歓迎
郵便振替
00160-1-1999
加入者名
籠屋新聞社

初年兵訓練を終えた後、硫黄島に派
遣されて全員が戦死している。
佐世保軍港から兵員輸送船で南へ向う。
八五〇トンの津山丸に三五〇〇人が詰めこ
まれていた。台湾の高雄に寄港した後、



PHOTO

半田正夫

中之島海軍俱樂部で、ありし日の半田氏

→命がかかっている。生きのびることこそ最終指令だ。2015.5.5.

大シケのなかと更に南へ向う。ルソン島と台湾との間に横たわるバシー海峡にさしかかったとき、魚雷攻撃を受け、甲板を潮が洗う大波の中へ兵士たちは投げ出される。しかも闇夜である。次々と兵士は波に吞まれて死んでいく。厚い長板にしがみついていた三人が三日目の真夜中に、偶然に通リかかった駆逐艦に救助される。その艦が、またも魚雷攻撃を受け沈没する。また救助される。

ルソン島の浜に上陸するが、戦局は得難くない。海と空からの米軍の攻撃手に逃げ回る。再編成された部隊が昼夜兼行で山中を北へ徒歩移動する。米軍の戦力の手ごたえは、北部の浜からビルマへ向うためである。強行軍であったため、また食糧不足のため、兵が次々と行き倒れとなる。ポロントの中のゴミすう重く感じられたと、半田さんは言う。軍隊手帳は手離すと

処罰されるのだが、空を飛ぶはちぎりを捨てた。そうするうちに米軍のルソン上陸をみる。終戦の七ヶ月前である。噂が耳に入ってくる。バレン峠では米軍と正価衝突したという。食べるものがなく、死んだ兵士を食ったそうだ。

小部隊となった半田さんたちは、食糧を求めて、輪番で原住民族のイゴロット族の集落に「徴発」に出かけた。つまり泥棒とはたらくのである。同じ部隊に皇下層兵の半田さんとかいって、くれる上等兵がいて、その人があしたの夜は徴発に行くから、食う物を持って帰たら、おまえにやるか」と声を掛けてくれた。ところが夜中になつたら、その上等兵が腹痛を起して、「内はもうダメじゃから、おまえ、代りに行ってくれ。」

翌夜、部隊から抜け出して、山の上の一番高いところに着いたら、夜が明けて、飛行機が飛んできた。それを見て、「海軍記念日

じゃ、いや、日本の飛行機が来た」と言っていて喜んで……五月二十七日じゃないですか？東郷元帥がバルチック艦隊をやつた日ですよ。」(半田正夫証言集)から)

せいか、徴発した唐辛子やニワトリがあったが、見えない樹林の向うから矢が飛んでくる。芋もニワトリも捨てて命をうかう逃げ出す。山にかり、自分たちが居た岩穴を見下すと、一帯が真っ白になっている。大きな松に落下傘がぶら下がっている。下の方に爆弾が垂れ下りていて、ゆらゆら揺れている。

米軍の新兵兵器で、ゆくり落下した弾が地面に当たったら、水平方向に破裂する。岩穴は厚い岩盤にフタをされていたから、安心して居たのだが、穴の奥まで弾が飛んできた。全員がやられた。上等兵は両手両足を代わればうらいたが飛び出していた。こんな戦況をくつもくぐめけて、半田さんは生きのびて帰った。

「父の周りはいつも本で溢れておりました。日本や世界の歴史はもちろん、人の姓、地域の伝承、そして故郷のことや自身のルーツまで……。まるで時を忘れたかのようにページをめくり、目と輝かせていた父の姿をよく覚えております。(後略)」

(「追悼のしおり」より)

この文は半田正夫氏の告別式に参列した各人へのお礼状の一節である。故人の蔵書の内容やその冊数がどれほどあったのか、社主は知らない。ただ並の読書人ではないことを承知している。三十年の空白期において、二〇〇六年が七早に改めた親交が断かれたとき、日取初に持参した本が、『臥蛇島部落規定』であった。すでに社主への質問が用意されてあった。「本文中に半田がたくさん出てくるが……村内では口之島に半田姓が二戸あったが、臥蛇にも？」

「あれは半田^{はんた}じゃなくて、ヒントを半田と表記したまでであって、社務所とも呼び、人名ではないのぞすよ」

その本を書いたのは社主であった。その後半田さんに送本した。「トカラの地名と俗名、上下二冊とも、やはり社主が著した。翌年、中之島で再会したのだが、またまた向われた。向われたというよりも、感想を述べられた。とんだ方がより正確であろう。数頁に及ぶ中之島の小字名と、地図に落して記入したのだが、そのひとつひとつを念入りに目通していた。

「(中之島の)ナナツヤマの開拓の連中が山の名を付けていたが、あんたの本の名の方が元々からあった名なんだなあ、って感心したですよ」

あの本の二字一字を端折らずに読んだ人は、おそらく半田さんが初めてではないかと思ふ。

半田さんの書物の選び方には一貫したものがあつた。出生地の奄美大島と論島の小学校をおえると、神戸に務めた。父親が「子に良い息子を上げ、学校に進学させるためだつた。十三才が十四才のころであつた。神戸では新聞を何種か購読していた。あるとき犯罪記事が目にとまった。この事件をおこした犯人はどんな罪に向はれるのだろう」と知りたくなつた。半田さんの十代の読書は、『六法全書』であつた。別の動機から、『人名辞典』を片身離さず持ち歩く。

おし、べりが大好きな半田さんであつたが、他人をおとしめるような口は一度も耳にしたことがない。また、一度自分で決めたことは、最後まで押し通す。信義に厚い御人であつた。

2014年

6/22

半田正夫逝去満九十三歳
造形作家の藤本均氏(在空間)
来訪。大分県に竹細工の見学
に行くとのこと。

7/2

武蔵野美術大学で竹がこ編
みの講師とつとめる。

7/24

安房くらの研究所(旧千倉町)
の菅野さん来訪。笹の根株
を付けたままのものを何株か堀
って持ち帰る。8/1から始まる

社主の竹炭会場の展示材料
に使うとのこと。

8/14

暑さが烈いなかで大工仕事
を始める。自室の拡張を始める。

8/30

お話し会。安房くらの研究所
トラック・マンションでころがして

西へ向う。夕方、相生の道の駅
の駐車場に着く。全行程、高

速道路使用なのだ。

② 歩いたり、止まったり、休んだり、寝ころんだり

9/4

朝食を早目にすませて、相手を出発。
正午前に周防大島の久賀着。

同地の生涯学習センターで竹
にまつわるあれこれ二時間弱

おしゃべり。参加者は二十余名か。

9/6

旧東和町の交流センターで竹
細工教室開く。当主の兄の高木春樹
氏は民俗学者の政官本常一氏の

仕事の紹介保存に尽力している。

9/6

岩国市広瀬(錦川上流の街)で
「川と竹」のおしゃべり。捕れたての

鮎の塩焼きを集いの主客着の

ご馳走になる。毎年、広瀬に
立寄りさせてもらっているが、これがで

きるのは藤井吉朗氏と堀江二家
のおかげ。両家とも地元で野菜

を作っている。その他にもあれこれと

手を叩きあっている。

熊本県八代市白奈久に着く。

9/18

熊本県八代市白奈久に着く。

① トラック(一屯)荷台のゴーカ・マンションで休んで、自炊して……

同行者：共荒川健一(カマラン)、橋爪大作
(文化人類学)。

夜、海沿いの広場で宴会。地元の

前山光則さんや緒方幸範さんら四人

も合流。皆はいや青北在住のひとり

を除く方は「九月は白奈久で山頭火」

の実行委員。小雨が降ってきた

ので、アズマ屋に入って宴を続ける。

9/20 「山頭火」の金でおしゃべり。

タイトルは「後す指をさされる勇

気にあやかたに」

9/21 鹿児島市入り。夜、照國

神社脇の自然食レストラン(赤

星秀一悠子主宰)の作業

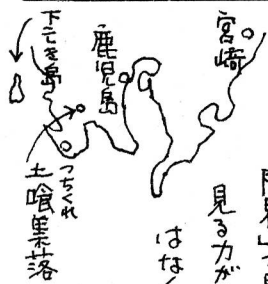
でトカラの島を話す。企画

したのは「臥蛇ロック」(ジャンたち

三人)

よくも、まあ、しゃべることがある

もんだ。① ① ①



物語の舞台は俗に言う「限界集落」である。が、現地に住む者にとって、そのコトバは迷惑な造語だ、との感想も著者はもっている。互いに助け合い、健康で幸せに暮らす人々と接していると、先の見えない限界などの垣間見ることもできな。著者はそれほど深く村びとと共に暮らしている。この本の原稿を書いている時点（二〇一〇年）で、地区のまとめ役であり、世話係でもある小組合長役を務めている。

「限界」が見えないのは、

見る力が足りないからで

はなく、「限界」という

レッテルを貼る

ことでしか、

「幸せに暮らす集落」

ジェフリー・S・アイリッシュ

新社会
2013年

人間集団をどうしようもない、安直さへの意志表示である。行政用語としての、時流を追う命名法なのかもしれない。いずれにしても、キツとさせられ、どこかで感情を逆などさせられるコトバである。

著者の住んでいるところは薩摩半島の内陸部にある。半島南端の海岸線にある枕崎までは車で三〇〇四〇分で行ける。周囲を山に囲まれている土喰集落は、二〇〇八年現在であろうと思われ、二十戸に七人が住んでいる。平均年齢が七十七歳というから、四十八歳（当時）の著者ひとりがいびき抜けて若い。著者はこの地に移り住んで八年になる。それ



幸せに暮らす集落

鹿児島県土喰集落の人々と共に
ジェフリー・S・アイリッシュ

以前は同じ県内の下飯島で、定置網漁師

をしていた。

上巻二巻目

人間は、いくら健康であるからといっても、高齢であるということは、死と身近に考えない日はないであろう。どのように生きるか、ということ、は、即ち、どのような死を迎えたいか、という課題と向き合うことにつながる。その現実と著者はさりげなく記している。「……〇〇さんと話をして、感じた。生きていくことは突然外素材なまどと。我々が最終的に残せるのは、接した人々との間に作られた空気にすぎない。〇〇さんのことを書き終えて十日後、電話が鳴った。レ

彼が亡くなったとの知らせだった。」

この一文を読んで、アメリカ生まれの著者の考へ方には馴染めないう人かいるが、もしれない。生前の縁者との交情はどうか、まづうのかとか、現世を引きずるの来世に想いを馳せないので、跡継ぎはとうなっているのかと、いろいろと疑問が湧いてくるかもしれない。

しかし、そうした問を發する前に、我々読者がまず考へなければならぬことは、「接した人々の間に作った空気にすぎない」という語句の内容である。それを証すためのヒントが別の頁に書かれてあった。引用してみよう。

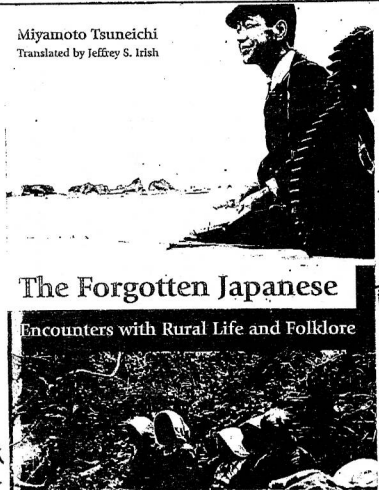
—— 小学校三年生の男の子が夏休みを利用して京都から遊びに来ました。大丸の六月灯に連れて行くと、自分で買ったのか貰ったのか、六匹の金魚を持て帰ってきました。うちには

水槽が無かったため、土喰集落にある野菜を洗うために、昔使われていた大きな石の桶にその金魚を放しました。けれど、も一ヶ月経たないうちに、五匹はタヌキがカラスに食べられて他界し、一匹だけが無事に残ったのでした。

先づ初めて知ったのですが、村仲間達は一ひそかにその金魚を「アメリカン」と名付け、^{イモ}獣に食べられないように、ヨシさんが桶の上に網を張り、年々大きくなるその金魚をかわいがっていたのです。しかし、今年のお盆の前に「アメリカン」に大きな不幸が訪れました。「アメリカン」がカラスに食べられ、たらしいのです。「金魚は初盆だ」とヒサコさんが笑いが私に言いました。「アメリカン」が食べられたことに私はショックを受けましたが、ヒサコさんの初盆の話を知りて、こんなに感性豊かな、それこそ死を笑うことのできる

友達に恵まれたことをとても幸せに感じました。
—— アイリッシュ・説、忘れられた日本人

Miyamoto Tsuneichi
Translated by Jeffrey S. Irish



著者はヨシヤンやヒサコさんの感性に触れることに幸せを感じ、さらには、土喰集落を「温いところ」と位置づけている。

人間は生まれ死にまでが一期であり、それを受け入れなければならぬ。だから著者は言う。「私自身は、土喰集落のような住み心地の良い場所がなく、なっていくのは寂しい。半面、ひとりの人間が亡くなるのと一緒で、ひとつの集落がなくなることは、とても自然なことである」

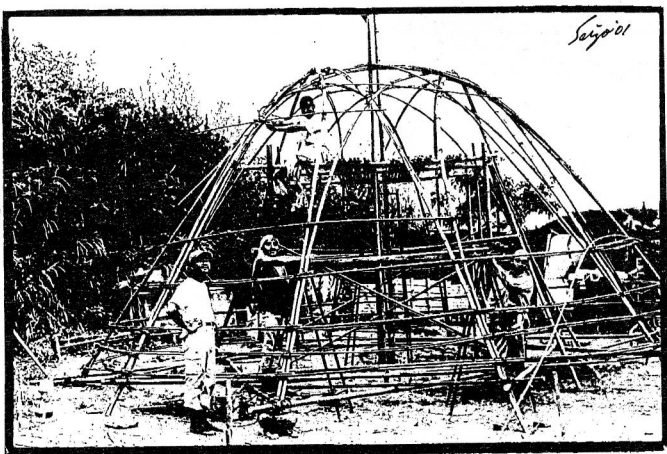
と、日々自分らしく過ごしている集落仲間を見て、最近思うようになった。「消えつつある集落をなんとか活性化しようと躍起になり、『人工呼吸器』をつけて生きようとするのも不自然なことだを感じる。」福祉サービスもより充実させながら、集落の行く末は主人公である住民に任せる。ひとりひとりが自取後の日まで大切に生きていくことである。それはとりもなおさず、集落仲間たちと接する日々の温かい空気が生を全うさせてくれるし、同時に豊かな死を完成させてくれるのだ。」



ジェフリー・S・アイリッシュ
米国生まれ。南九州市在住

著者は、民俗学者としての名のある宮本常一氏の名著・『忘れられた日本人』の英訳者である。英訳書は他にもある。二〇一三年には、^{（ミヤジマ）}飢島に住み着いた医師の日記を英文に訳して上梓している。日本語で著した自著も四冊ある。そのどれもが、日本の隅々に暮らす人々を生き生きと描写している。母国や日本の大学で文化人類学や民俗学を修めた著者であるが、決して研究室の中にこもっている人ではない。資料を跋涉したばかりの民俗学書ではない。その姿勢は描かれる側にも伝わるであろう。集落住民は著者の日常への見配りをとらえ、遠く米国のいる親のことになると、親の立場になじみ配ってくれる。そこには国の境がない。国際交流の源流をたどる旅人である。『Society is the joining of different ones - Overcoming the tradition of the self (社主注)』も作ったものは神でもなければ鬼でもない。向いに軒両隣りにすむ人々の「……」も夏目漱石も草枕も

八角形の集合体でドームを作る。



竹ドームの制作には、早大理工学部
の院生たち（二〇一三年）
山崎マコ・三島・田口安原たち。
於本社前庭

壁 2005-2014 田 田田沙也香 私家本 2014年

「この度、一〇年間にわたって寝かせておいた壁の写真を、自分で本を作りました。これは、自分の制作や暮らした風景に寄り添ってまた壁の写真群は、制作の資料とも作品ともプリント写真ともつかない存在として私の中を漂泊し繁殖し続けてきました。これを作ることが何になるかわかりませんが、一度「綴じる」ということを試みる必要がありました。」
この一文はイベンントへの案内文である。

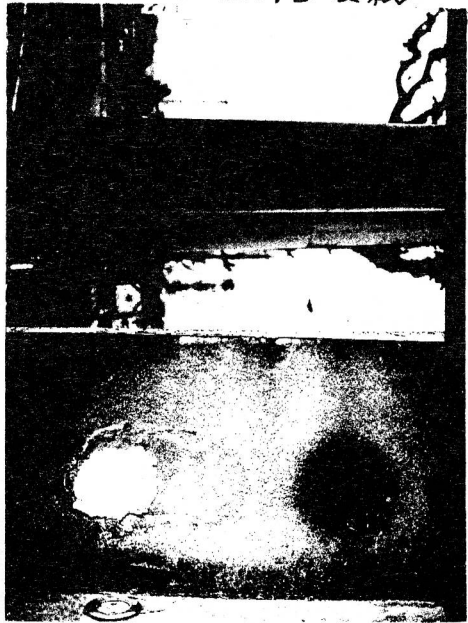
△ △ △

この本は壁面を撮った写真が載せてある。銅が目立つタタ張り、壁、電柱に貼られたチラシ広告や鋼鉄製の認証プレート、ブロック塀の側面、仮面と思わせる節穴が配置

されている板塀など……評者はこの本を何度開いても、そのつど新しいものを見つけ出す。「何年か、壁に閉じがめて……」と本人から聞かされたのは、五年前である。ゆたし（評者）はそのとき、壁と真つ正面から向き合っている人がいるということに感嘆した。自分のなかで、もやもやとしていた何かが刺激されたのか、頭の中でめまぐるしく回転し始めるものがあつた。同時に、自分がこれまでに遭遇した壁を探し出そうとしていた。

最初に浮上してきた壁の風景は、鹿児島郊外の磯公園へ向かう海沿いの道であった。規則正しく積まれた石壁である。

壁 2005-2014 表紙



幅が三尺（九十五センチ）で、高さが一尺（三十三センチ）ほどの石が十五段近く積まれている。崖の形状となす壁が四メートル余の高さに達している。古色蒼然とした青黒い石壁の上は平地になっているとみえて、家が建っていた。漢とした視線を壁全体に注ぐと、壁の中ほどに色違いの石が埋めこまれていることに気がついた。その別色が斜めに

走っている。路面と同じ高さから始まって、最上段まで続いている。以前は階段であつたところと、新たな石で埋めた跡なのだろう。そうだとすると、現在はどこから出入りしているのだろうか。

遺跡をたずねていくはみかへになった。道脇の崖もどきの壁を目にしただけで、これだけの想念がふくらんでいくのだから、十年の間、壁を身近かに引き寄せて観察してきた人のふくらみ様は計りしれない。本書に収められている壁の総数は四百を超えている。その壁群にどれほどの人々が込められているのかと思うと、気が遠くなる。

G
G
G

ひとつひとつの壁に何かうまなごしは真剣である。それは肩肘張った選取眼があらはじめ用意されているのではなく、「おもしろい」と感じる

にき大切になっている。イノチガケで遊んでいるのである。日常の暮らしの不自由さを承知しつつも、意欲から抜け出さないでいる人に想いを走らせたとき、フッと数学者の岡潔氏の断章を思い出した。

……(奉職していた大学の)職員室は二階で、だれも時計を持っていないから、いま何時かを知らなくなつたうち、いちち下へ降りて、入り口にかかっている時計を見て来ていた。数学の問題に考えふけりながら時計を見に行くと、いろんなことがある。



岡 潔 (1901~1978)
他論数学素複数変多
受賞章文化朝日・文化

熱中ぶりのいちばんひどいときは、何とに行たのか忘れて、便所へ行って小便としてそのまま上がる。考え込み方のもう少し浅いときは、時計があることだけを見て上がり、文字どおり時計を見て来るわけだが、これではいかたがない。

もう少し浅いときは、針の位置だけを見ても、それを記憶する。部屋に戻ってから、どちらが長針、どちらが短針、といった推理して、それが何時何分かわかる。このときは記憶だけして、あとで大脳前頭葉を使って判断するわけである。

いちばん浅いときは、時計を見てその場で時間がわかる。そしてこのときは、何のために時計を見たかも、ちゃんとわかつている。大脳前頭葉による判断が、働いているわけである。……

……わたしは数学の研究に没入して
いるとき、自分意識するということ
がない。つまり意識の時期に在るわけ
です。そこへ行こうと思えば、自我を抑
止すればいい。それでわたしは研究室員
に「数学は数え算三つまでのところで研
究し、四つのところで表現するのだ。五つ
以降はけしして入れてはならない」と教
える……

③ ① ②

岡氏は何を言いたいのかわたしなりの
判断をした。つまり、対象に向かつて没
入するときは三歳児とかうらない。

本文中の対象物は時計であるが、その対
象を丸ごととらえる方は三歳児にかな
わない。大脳前頭葉を使っている
からである。針の指している方向を
時間に置き換える作業は別の
ことであり、その業は大脳前頭葉の

働きに待つしかない。現在の教育は
初めから針の方向の置換作業を
教えようとするから、時間はすぐに
わかるのだが、時計の全体像を丸ごと
とらえる力が育たない。これでは
教育ではない」と氏が言っているよう
に思える。

この本制作者は油絵を描いている。
その作品は平面を抜けて、立体に
なる場合もある。この壁の本も、ど
かの分野に組み入れることはできない。
丸ごと対象をとらえようと思えば思
うほど、三歳児に向かつて行く。何もの

にもとらわれない、伸び伸びとした線と
描くことができた幼児が、学校に入って
絵の授業を受けるようになる。たち
どころにつまらぬ絵を描けなくなる。
壁にとりつく作者の目は伸びやかである。
本人は「三歳児」を目指しているに違いない。



9/19
九月は日奈久で山頭火に祭りの前夜の宴



9/15
旧東和町交歓センター

竹にゴ作りの実演をする

五月三十日(土) 午後二時 吉祥寺のコミュニティセンターで(講者はトウモロコシH.P.)
告 登 予 平島のマラーノ(二重は若者) 一回「遠島人」

ギリミタン信仰を表面では棄てても、

デウスに捧け続けた隠れギリミタンたち。

海の向うのいべりア半島には、マラーノと

呼ばれる隠れユダヤ教徒がいた。

どちらにも二重の顔を用意している。

△ △ △

わたしはトカラの平島で暮らしていたとき、

若者のひとりが我が家に怒鳴りこんで

きた。「お前を包丁で刺す」と息巻く。

島の肉情を文字と通して外に暴

露した裏切り者として糾弾され

た。執拗な糾弾は裏切り者も怯

えさせ、発言を封じ込めることに

成功する。が、それは表面き

ポーズであり、その者は生活を

二重にして生きのびる。

わたし(ジャン)の二重認識の出發

点であった。

しかし、妙なめぐり合わせで、好鳴り

こんだ若者も二重生活であった。

昭和二年(1897)に始まる遠島人の

七代目として、百数十年にわたる汚辱と

自尊のせめぎ合いの中で二重、三重の

暮らしにのた打ち回っていたのだった。

ス 無人島・臥蛇の元居候才助 語
臥蛇フラッグの披露(臥蛇ロック)
告 六月八日(月) 午後二時
「作樂」で臥蛇ロックの集い。

臥蛇島上陸映像(新里貴之)



9/20 祭りの当日の主会場での弁士役を担った。たうもてせ士当担

古い写真をプレゼントされた。1970年代の民俗資料になるな。

▲ 天上の農作業が ↓ PHOTO 工藤員功



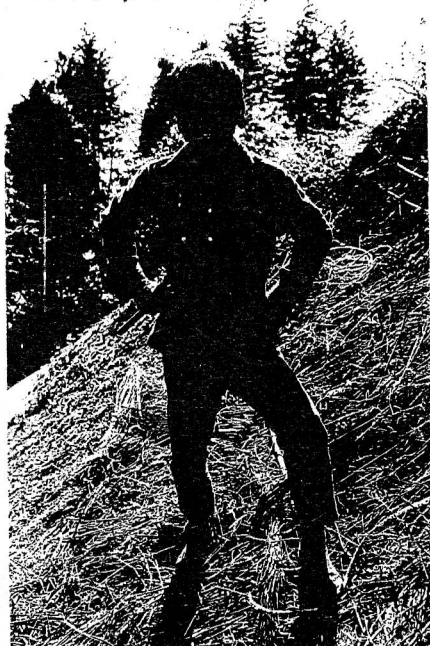
二〇四四年七月十二日に武蔵野美術大学で竹籠編みの教室が開かれた。基礎デザイン学科の板東孝明教授の開講のアイサツの後、工藤員功氏がシャシに近づいて来て、二葉の写真も手渡し

てくれた。工藤氏は元同校講師で、民俗資料室に詰めていた。

撮影地は茨城県笠間市で、日時は昭和五二年秋以降で同五四年、五五年の間の秋晴れの日であった。つまり、一九七七年、五六年の間である。写真に撮っている田舎が何と知っているかと云うと、茅葺き屋根の上で茅をほがして、軒下へほうり投げている。それも三日続けて行ったときのスナップ写真である。永年わたる油煙の堆積が茅をすくさせている。

作業中に流れる汗がすすき吸い、二、三時間すると下(↓)の写真のような姿に変えてしまう。止園だけがやたらに白く光っている。水で鼻腔を洗っても、思々としたすすきは落ちない。

パンツまで ススに染まっているはず

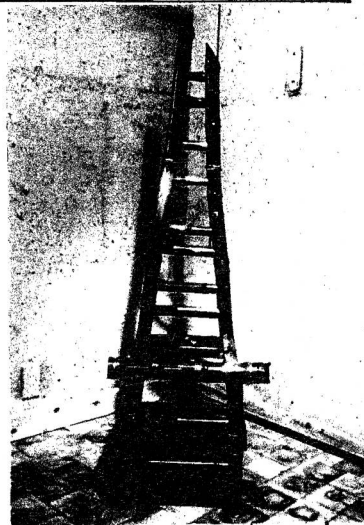


PHOTO

工藤員功

イロリ、カマドから立ち上がる煙が二〇年、三〇年に及ぶと、天井の裏側には、ススノでつくえるほどの厚いススの堆積がみられる。それが固まると、板の上の墨がでる。

この作業人夫のお目当では墨でもなければ、茅でもない。はがし取った下にある竹であった。建材として使われている竹が、屋根全体に敷きならべられている。屋根の大きにもよるが、五〇〇本以上ある。



PHOTO

荒川健一

なのだ。タテとヨコに、間隔を置いて並べられた竹を結んで、その上に茅を乗せて、屋根としての機能を作り上げる。

家を建替えるとなれば、まず初めに茅をばがす。次に下地の竹を取り除く。結束した縄は二〇〇年

たうも腐さらない。縮むらの入

手がむずかしい地域ではカズラのつるを代用する。これはワラ縄よりも丈夫で、

年月をかけて吸い込んだ

油煙が、銚の刃をこぼす

ほど固くしまってくる。つい

でに言え、銚線は百年

でボロボロになる。

「コンクリー四百年、檜

千年」のコトバがあるが、

法隆寺は強度も増し

ていくが、新宿の高層

油煙に染められた竹は銚色・サボロトのような、おいそうな光沢を帯びている。その縄に加えて、縄目^{なひめ}が無作為に入っている。あんな年月が竹に命を吹き込んでいる。この頁の椅子の字真実を見てもうえばかりのたが、銚色の一木の中に濃淡がある。更に目を凝らして見ると、脱輪とはめたような模様が何ヶ所かに入っている。これらがすべて縄目である。

この模様かどのようにして染められるのかと云うと、竹を縄で結束した際



PHOTO

荒川健一

どには、四百年後はカシヤの山と化す。

話がそれた。解いた縄の下には油煙が

入りにくかったために、銚色が淡い。それ

が自然な模様となっている。それを

美しいと見るのも、人の自由であろう。

パニツとまる思にしている男の煙けた

竹を使った作品群を見た、方は咽

書館に行つてみよう。だい。本の名は

「竹組みエ芸」 日貿出版社

デニワ〇三・五八五・三三〇一

2014年

9/22 昨夜の作業(自然食レストラン、スワセ島のナリガが詩の朗読会とよくする店この臥蛇ロックの会は熱かった、二十人ほどいた。平均

年令は三十歳前後が。堀やかず子さん(臥蛇島出身三世)と初対面。

中之島に荷を送る。今夜、十一時過ぎに「エリー」としまは十島村へ向う。

「早川さん、米川さん。おはようございませう。昨日曜日は照国神社近くの作業という店で臥蛇ロック主催の会があり、夜の十二時過ぎまで作業しました。泊ったのはトラック・マンションです。

けさはこれから、臥蛇島出身三世の堀切さん夫婦の案内で枕崎へ向います。その地に臥蛇島のことを詳しく記憶している小母

再び、歩いたり、飲んだり、7/7をまじり...

さんが健在だということ、話を聞きに行つてきます。その地に数回滞在する予定です。足と延ばして坊の津も見学してきます。

ミカン、他を同封しました。尚、

9/22 枕崎のフミ子小母を訪ねた後、堀切夫婦とも別れ、坊の津へ行き、

久志集落の港で泊まる。

9/23 終日、マンションの中で、昼寝、読書、自炊をくり返す。山川

から釣りに来た夫婦が近くで糸を垂れていた。釣るよりは好きだが、

魚は食べない人たちがなので、鮮魚、の差入れを受けて大助かり。

オニギリ飯も世間。雨台風が東シナ海と北上中で、夕方以降は雨ばかり。半島から届くベニグル

番組が良く聞える。

9/24 ここに来て丸二日移動して

いない。無為の時空が楽しい。午後、南九州市川辺町在住のシェフリー・ペルシユが訪ねて来る。ヒロの橋口博幸をももなう。十ヶ月前に東京から、

鹿児島島にリターンした若者、武美大に十余年在籍していたとか。シヤシヤと

共通の友人、知人が何人かいた。夕食はシェフリー家でヒロ・シヤシヤがよばれる。久しぶりの美食に酔う。

9/25 午前、枕崎のフミ子小母宅に寄つてから、鹿児島市内へ戻る。



人は時

2015年二月九日(日) 毎日の最終土曜日は

トカラ塾の開講日なので、東京に行く。

今回の話者は渡邊嶺也であった。

二十六歳の若者の、この二年間の軌

跡をたどってもう。インドネシアや

『トウ・マスト』監督ダニエル・マロリーニ

自由のための戦い。武器は、音楽



パラ砂漠の遊牧民トアラ族の「トアラ・マスト」。

タイのバンコクの路次裏を素手で歩き、
帰国してからは、トカラの島に渡り、その後
自転車、鹿兒島、東京まで走る。
ニンジンを目の玉にぶちあげない不丹と
明日、何としても、かまひな、快感をせめぎ
あいのながでの日々の生々しい証言が続いた。

△ △ △

望みは雨。せっかく東京に出てきたの
だから映画を観てから鴨川に泳ぐと
思った。渋谷の小さな小屋であるアツ
リニクへ向かう。『トウ・マスト』を観る。

ーサハラ砂漠西部。インドネシア、
真のまな布で全身を遊牧民トアラ
族の物語。20世紀初めにフランスの植民地
政策のあおりを受けて、遊牧民が五つに分断
された。アルジェリア、ニジェール、リビア、マリ、
ブルキナファソである。青衣の民のトアラ、
族は、他のイスラムの民とは逆に、男が布
で身体を隠し、女が肌を露けにするミ

もある。女が夫を怒る権利を

元レジスタンス兵士が銃と
ギターに持ち替えて、音楽
で世界を変えようとい
続ける。

△ △ △

ノマド (Nomad) カンフ
コトがある。ギリシア語に

源を築いている。うしい。遊牧
民流浪の民を意味する。

空間を分割せず、固定した
中心を成り立たせず、また

階層をこりぞける。民たち
のことを言う。これは権力と

それに伴う暴力へ立ち向
う人たちの考えをよびく

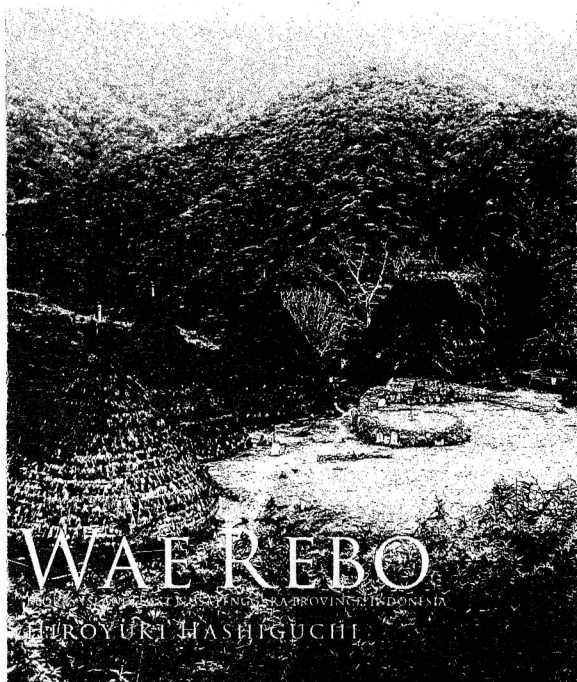
てきた。安楽椅子に背
もたれる都市生活者の考

えとは違ふ。砂漠の哲学
である。

TOUMAST

「トウ・マスト」とは、元レジスタンス兵士・ムーサ (トアラ族) が率いる バンド名。

十五頁の写真も主体にした冊子である。
この美しい竹ドーム群が消えていく、ある
いは、その中で暮す人々の心が市場経済
になじんでいくことは間違いない。
伝統をリレーして暮す環境が消
えることを口惜しいとは思われない。
ただ、祭壇を囲んで環状に建ち
ならぶ風景は美しい。大都市の



『ワイレボ』 橋口博幸 2013年

ビルの林が美しいと思えないだけに、
この円錐型の巨大竹ドームが消え
るの（悲しい）。それなら保存法を考
えたラノと叱声が必要で、きそうに
か、それに答える代替案が浮か
ばない。人間の物質欲には限り
がないからである。著者は、現段階
では（暮しの）不自由さ（住民は）

選択している。それも現代文明の利便性
を理解した上でのことである、との著者の
声にうなづきたいが、不安は消えない。

△ △ △

早直への舞台はインドネシア東部に位置
するフローレス島である。海拔二〇〇米
の高地にあるワイレボという地で、マンガライ
族の居住地である。周辺の僅々落の散し
い様変りの中で、よくもワイレボだけが生
き残ったものだ、と声援を送りたい。

建物の高さは（は）五メートルに達し、建材として

竹が多用されている。一棟に六、七、十の

家族が住んでいる。一階が居住空間に

なっていて、各家の個室が外周に沿

ってならんでいる。そして、同じ階の中心

部にイロリが切られていて、共同炊事場

になっている。南米インディオのロング・ハ

ウスを想起させるが、ワイレボのオガ

個の意識がより強く部屋割りにあ

くわれているようだ。〇〇〇。

2014

9/26 山本進さんと訪ねる。宮崎

県東臼杵郡美郷町宇納間

は日之影町の南にあり、平坦地

も広く、ゆとりと、感じさせる。

ムラである。山本氏は合併前の

宇納間の村長であった。竹細工

の匠である。故^ゆ廣島一夫さんの甥

である。故人の思い出話を聞き

たくて訪ねた。

「一夫^が叔父^{あじ}ちゃんは今、ゆが家に何年

か居て、竹がこを編んでました」

と、親しみを込めて語ってくれた。

9/26 タカ、日向市へ出て成合昭一宅

で歓談。一年ぶりである。成合

が鹿見島大の在学生のころ

天文館のバイト先で知り合った。

シャユの常宿であり、鍵を

渡されているから、いつでも

出入りできる。

再三 動いたり、止まったり...

9/27

日向市の成合宅を午前中に発ち

大分へ向う。三浦梅園資料館(安

岐町)と児玉美重宅(杵築市)

に立寄ってから、同県築上郡にある

道の駅「新よしとみ」の駐車場に

夜の八時過ぎに着。卓上コンロで

炊飯し、おそい夕食。ミラココの

圧ビルをおおって天下を取る。

午前10時30分、みずの駅を発って

東へ向う。八時30分に山陽道(

高速道)の美東サービスエリア

に着き、朝食を摂る。その後、

フトンをかぶって、ゆくり朝寝。

夜、新名神高速道の甲南

パーキングエリア到着。高速道

を運転するのは楽だ。ATM

カードを使うようになって三年目、

やめられないね。

10/5

鴨川市代々の八雲神社境内のそうじ

10/8 八雲神社祭礼。直会に加わるが、

神輿はかからない。腰が痛いから。

10/6 下町(南子住)浅草間の路次裏散歩。

松崎運之助さんに案内してもらった。同行

者は緒方幸範さん夫婦(在、八代市)

10/25 タカ、出領せと宇摩(岡山県瀬戸内市

来る。逢坂で飲むビルと。

11/8 書斎の増築スペースの内装を終える。

外装はまだ。これであすから竹細工の

注文品作りができる。

11/24 流山市の真澄園(アツタ主室)で

11/30 竹がこ編み教室。ワラ細工の山本

あまよかしむ嬢と一緒の催事。畑の中

のビールハウスの中にミナミヤンが居ま

った。このアツタ企画の集まりは

何年になるだろうが。五回はやった

気がする。

(五回五回)

2015 1/30 国分寺市の寺で水仙忌。故宮本堂で

村内(トカラ諸島)は無人島がいくつもある。臥蛇島、小臥蛇、横当島、上根島...

十島村内の無人島の埋蔵文化へ光が当り始めるか
鹿兒島大学埋蔵文化財調査センター

「新里さん

再回答の添付資料がそちらに届いたと思

います。(中略)ー

ひとつ加筆させていただきます。

物騒なコトバつまり、盗んだ

というコトバですが、その語調に

戸惑われたのなら、わたしの

不手際です。ご容赦ください。

すでにご存知だと思ひますが、

細野義彦さんの著書に

『古文書返却の旅』というの

があります。戦前戦後を通して

調査者が地元から「借り」

と称して、返さないままにして

いた古文書類を返却して

歩くことも、細野さんが始めたので

す。(中略)ー

十島村内(トカラ)の島々も含め

て、どれだけのモノが地元から消

えたか、それは定年された方です

鹿兒島歴史資料センター黎明館

に勤務されていた方の中に気付いて

方がおられました。

こつた「盗む」誘惑から、わたし自身

も含めてですが、どうしたら足が流

えるか。大英博物館のエジプト展

品のように、植民地から何を持ち出

ても罪が問われないという、時代の

所作を踏襲することは許されま

せん。

そうした意味で先の物騒なコトバを

吐きました。わたしの著書が島々

から消えたことなど、たいしたこと

ではないのですが、「盗む」行為が

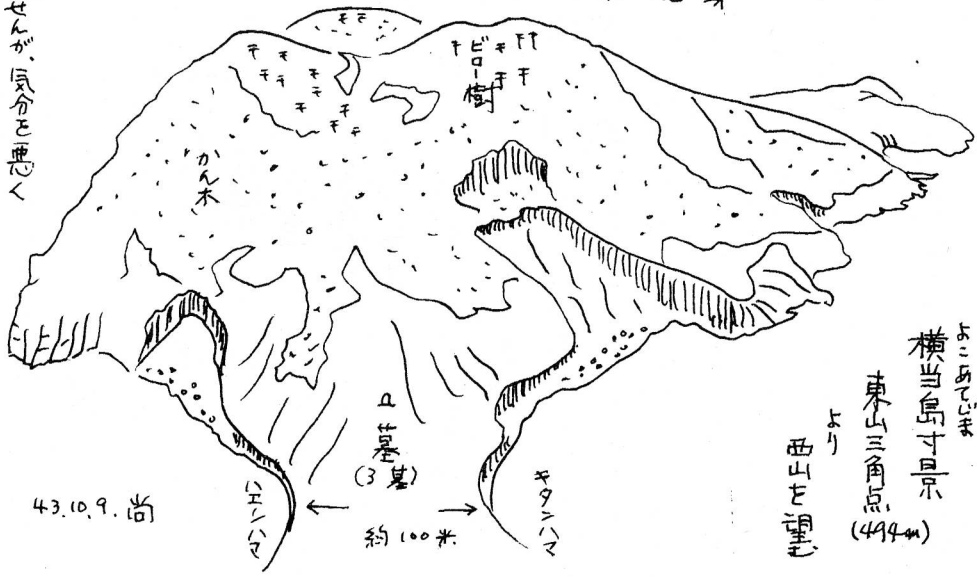
まかり通らない時代が望ましいと

わたしは思っています。

虫見兄がどのようにお考えか分かりませんが、気分を悪く

されているのではないかと不安になり、このメールを差上げました。」(↓)

横当島寸景
東山三角点 (494m)
より
西山を望む



✓以上のメール文は、かつて臥蛇島にあった殺ボール一研分の石器がどこに消えたのか、の問い合せへの回答であった。

新里貫之さんとは14年十一月以降情報交換をしている。機会があって、臥蛇島に二、三時間上陸したようだ。そのわずかな時間に平安期の土器を採集したと言う。旧集落跡地においてであった。フロはすごいね。

シヤシが後生大事に抱えている「ガヤ」の埋蔵物が陽の目を見れば、新たな臥蛇が見えてくる。素人に何の手つだいができるのか、分からないが、楽しみだ。

一ヶ月後の二月七日(日)に鹿嶋へ来て、このことになっている。

△ △ △

ついに、この生数ヶ月の予定を記しておく。
5/30 トカラ塾でおしゃべり。演題は「平島のマナー」

(二重生活者)

初回は「遠島人」。二回目は「降る」

・後流帰島者、ラニドワライ

・脱走代行兵

・教員・工事

現場監督

所ジョージスター

で成南から鹿児島へひとっぴり

8/8 夜、ネリとしま

で中之島へ。海防俱樂部の早川

さんのお世話になりつつ、

シヤシの著書の電子書籍化

をすすめる。シヤシは道すかれて



海防俱樂部中庭から御岳(オタケ、979m)をのぞむ。

いるばかりの日々であらう。助っ人としてヒロが同行してくれる。

6/集 平島へ泊旅行

6/集 中之島と登る鹿

見島に出る。

6/集 長崎県上五島の

山田駿明宅へ。

そこに当社のトラック・マシン

ショウがある。島内を

散策した後、佐世保

に車が出て、あとは

ひたすら東へ向う。

7月 自宅改修の大作

業に明けくれる。

9/9 園防大島交通セ

でしゃべり。

9/27 徳之島、加計島、鹿嶋へ。早川山領也

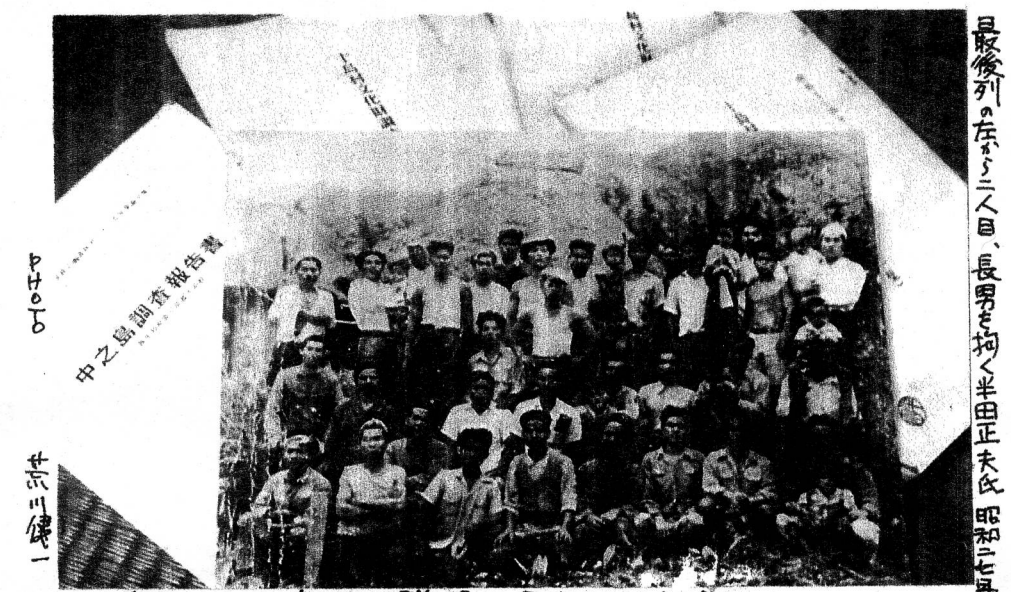
たちと、ホニ(山田鬼也)の事蹟をたずねる。後日、一書としてまとめる。✓

半田正夫証言集 - 出征記 & ナナツヤマ南拓民群像』を読まれた方は

電子書籍をご利用下さい。発行所：海遊倶楽部 tokaramobsea@gmail.com

全文はおよそ2万字です。復員後の中之島での南拓生活、その後の砂糖世、農家・村議時の話も収められています。当社の主が7年かけて闇を取った、生々しい語りの連続である。

紙本をお望みならば、当社へ申込下さい。印刷・製本(横書き、片面印刷)代ニ千円。



最後列の左から二人目、長男を拘く半田正夫氏 昭和十七年?

中之島 ナナツヤマ 南拓民群像 『半田正夫証言集』から。

9/某 日向市、成合屋道。

9/某 豫岩園市広瀬で堀江二祿と藤井

吉朝二統と会う。

10/三 三重県紀宝町で竹が教室を

もつ。おじやべりも少し。

10/工 工房からの園野外展が始まる。

11/22 流山市のアツタの曲屋園の「三

ルハウス内で竹が編み教室。

この教室はなま半かな内容で

はない。朝九時ごろから始めて

暮れても、暖とりながら編み

それを二日やる。昨年は手がご

(買物がごの小ぶりなもの)

本身はクエ入れがご。たて長で、内

側にはスーバーのビニール袋が

ひっかけられるようになつて

かごの内側がよごれない。中途半端

がまうなアツタに尻を叩かれながら

シヤミはいつも泣いている。